

2024年3月8日

世界の人びとのための J I C A 基金活用事業 活動報告書

1. 業務の概要	
(1) 事業名	グアテマラで学習塾を開校し、学に志す子ども達の基礎学力を底上げする学習支援事業（チャレンジ枠）
(2) 実施団体名	NPO 法人 ^{しえん} 幸縁
(3) 実施期間	2023年3月1日～2024年2月29日
(4) 実施国	グアテマラ共和国
(5) 活動地域	ソロラ県サンティアゴ・アティトラン市
(6) 活動概要	<p>①活動の背景：</p> <p>本法人の代表は、青年海外協力隊の任地として縁を持ったグアテマラで、自身の専門を活かした教育活動を2019年から行っている。2018年現地国勢調査によると、グアテマラ公立小学校の生徒在籍率は5割、中学校は3割を切っており、この要因のひとつは教育に対する一般的な意識が高くないこと、もうひとつは進学の意味はあれども経済的に難しい家庭が一定数いるということが活動地の実査で分かってきた。そこで本団体は、学力優秀だが経済的困難を抱える家庭の子どもを対象に、中学進学のための奨学金事業を第一に始めた。奨学生選考の一環で小学6年生を対象に基礎的な学力テストを行うが、優秀生として学校から推薦された子ども達ですら、四則演算がままならず日常的に使うスペイン語のスペルミスが目立つ。しかしこれは本人の能力の問題ではなく、一般的な公立校の学習環境に依る。というのも、グアテマラの公立小学校は、教員の能力不足やストライキにより全ての学習単元が終わることなく初等教育が修了するケースが日常だからである。これでは苦勞して中学校に進学しても、中等教育の学習内容を知識として身に付け自身の糧とすることは非常に困難である。そこで小学生高学年を対象に、学校施設以外で学業を学べる場として活動地初の学習塾を開校し、新たな形の教育支援を始めることとした。</p> <p>②活動の目標：</p> <p>申請当初の計画としては、読み書き計算を徹底し、基礎学力の向上に比重をおいた塾の運営方針を考えていた。しかし直接リーチできる対象者が（特に活動初期は）限定的になる中でも、より効果的かつ広範囲に学習塾の意義（即ち教育の必要性）を認知してもらうために、キャリア形成における学びの活かし方を考える場、更にはコミュニティ内の社会課題を自ら見つけ解決に向けて取り組める人材を育てるリーダーシップ教育を指導する場としての役割も併せて担うこととした。塾生の育成像は、将来、活動地のリー</p>

ダーとして活躍し得る人材を育てることとし、この育成像を基に授業計画及び指導案を考案した（詳細は後述）。実施期間中の活動目標は、①学習塾の運営方針を明確にし、指導内容のフレームワークを作ること②法人代表が帰国後も現地スタッフのみで塾を運営できる体制・環境を整えることの2点とし、これら活動目標の遂行は、法人代表が直接勧誘した現地協働者（学習塾主任講師）と共に行った。

2. 業務実施結果

(1) 実施した内容

【実施内容①】

学習塾開校前の準備

2023年2月：学習塾を共同運営する現地協働者（現地塾主任講師）の決定。

2023年4~5月：法人代表が現地に渡航（4月）。塾の開校目的・ターゲット層・指導内容・指導スタッフ募集条件・塾生募集条件について現地協働者と改めて話し合い、本学習塾の運営方針を決定する。

開校目的：子どもの基礎学力向上・教育（進学）の意義の浸透に加え、コミュニティのリーダーに成り得る人材を育てる場を目指すこととした。

ターゲット層：保護者の理解・協力があり施設使用料が支払える家庭の子ども達を第一の対象とした。←有料でも本学習塾に価値を見出して利用してくれる層＝教育に対する理解がすでにある層への普及を先ずは目指すことに。事業申請時に計画していた奨学制度の導入はひとまず先送りすることとした。

指導内容：読み書き計算の基礎学習に加え、リベラルアーツを取り入れたリーダーシップ教育、会話に重きをおいた基礎英語も併せて指導していくことにした。特に計算練習や音読練習の指導法についてはまず計算の普及で著名な陰山英男先生から直接ご助言をいただいた。併せて1週間の時間割、1年間の開校時期も決定。←英語クラスを導入した理由は、現地での英語教育に対する需要が高いため。

スタッフ募集条件：将来教職関係に就くことを希望している学生等（20代）。←当初は教員経験がある40歳未満を条件としていたが、本学習塾の指導内容は一般的な現地公立校とは大きく異なるため、先入観がなく新しいことへの適応力・吸収力が期待できる20代の教職現場未経験者を募集することとした。また当初は時給制にする予定だったが、一定期間は無給とし、代わりに無償での英会話指導と一定期間就労後にディプロマの発行をすることとした。

塾生募集条件：活動地市内在住の小学4、5年生。学校の平均成績75%以上が望ましく、保護者の同意・理解がある者。本学習塾が用意した筆記テストと保護者を含めた面談、2週間のトライアル入塾期間を経て総合的に判断し、正式な入塾を決定することとした。←学校での成績条件を付けた理由は、スペイン語での意思疎通がある程度でき、時間・約束が守れる子どもを募集したいため（現地学校の成績はテストの点数に加え、出席率・宿題の提出率・授業への取り組み態度も大きく反映される）。本団体の日本スタッフは現地語が話せないで、スペイン語（現地公用語）が通じ難い子どもとのコミュニケーションは非常に難しい（常に現地スタッフを介在する必要が出てきてしまう）。また日本のNPO法人が母体である学習塾なので日本人と共に活動する機会が諸々あり、時間や約束が守れる子どもでないと共に活動できない。

2023年6月：ボランティアスタッフ募集開始。フェイスブック（現地で普及している SNS）を中心に広報。同月末にスタッフ決定（この時に加入したうちの2名が現在も継続活動中）。

2023年7月：塾生の募集開始。フェイスブック・ラジオ・テレビ CM を用いて広報。筆記試験、面談、トライアル入塾を実施。同月下旬、学習塾開校。

【実施内容②】

学習塾の運営

2023年8月：第1ターム（10週間を1タームとし、年間4ターム開校。）開始。現地協働者（主任講師）とボランティアスタッフ2名が各教科を担当し、法人代表が総括的に指導補助（主に計算教育）。来年度の法人代表の現地渡航まで現地スタッフのみで塾を継続運営していける環境・体制を整えた。同月下旬、法人代表が帰国。また第2ターム開始前に塾生を再募集。フェイスブック、村内での張り紙を活用して広報。ボランティアスタッフ1名が新たに加入。

2023年9月：法人代表帰国後は、週1で現地スタッフとオンラインミーティングを実施。同月下旬、第1タームが無事終了。新規入塾希望者の筆記試験、面談、トライアル入塾を実施。

2023年10月：新たに加入した塾生を加え、第2ターム開始。

2023年12月：第2ターム無事終了。ボランティアスタッフ1名が脱退（私立校への就職が決定）。同月下旬、本団体のクリスマスチャリティコンサートにて本塾生12名が日本から寄付されたピアノカを用いた曲「もろびとこぞりて」を演奏。同月末、日本人有志・現地教職員に向けた学習塾の成果報告会（オンライン）を開催。

2023年1月：第3ターム開始。ボランティアスタッフの再募集。3月中旬、第3ターム終了予定。その後、約一か月のインターバルを設けて新規塾生を募集予定。

(2) 実施成果：

上記の実施内容により、本事業の2つの活動目標：①学習塾の運営方針を明確にし、指導内容のフレームワークを作ること②法人代表が帰国後も現地スタッフのみで塾を運営できる体制・環境を整えることを見事にやり遂げ、本事業が次年度以降も継続して活動していくことができる基盤を作りあげることができた。各成果の詳細は下記の通り。

現地学習塾スタッフ：法人代表と同等の熱量をもって本事業に取り組む現地協働者を得られたことが、本事業が成功した一番のカギである。後に加入したボランティアスタッフも、積極性があり志をもって学習塾での指導を行っており、頼もしい人材を得ることができた。また現地スタッフは皆仲が良く、学習塾で同僚や子ども達と過ごす時間を好ましく思ってくれていることが大変心強い。

塾生の数：第1ターム開始時は6名の子どもを塾生として受け入れた。第2ターム開始時では新たに9名の子どもが塾生として加わった。現時点（第3ターム）では13名の塾生と共に活動中である。事前リサーチから予想していた人数よりは入塾者数が少なかった現状ではあるが、活動地からの報告によると、約半年の活動期間を経て活動地内で少しずつ学習塾の認知と活動内容への興味関心が高まってきており、入塾についての問い合わせが増えつつあるとのこと。

学習成果：塾の開校から約半年経った現在において、①1ターム（10週間）継続して行った計算練習（1桁同士のたし算100マス計算）において、塾生の全員がターム開始時の1/2以下のタイムで問題が解けるようになった。②入塾時はほとんど話さなかった子供が、読書・作文クラスを通じて発語が劇的に増えた。③リベラルアーツのクラスを通じて音楽や美術に大きな関心を持った子供が複数名いた。本団体主催のオンラインクリスマスコンサートでは、1タームかけて練習したピアノ演奏の成果を12名の塾生が約50人のイベント参加者の前で披露し、好評を博した。

本内容は23年12月末のオンライン成果報告会でも公表しており、日本人有志（教職関係者が主。陰山先生もご出席）・現地教職関係者から高い評価をいただいた。

(3) 得られた教訓など：

①本団体の事前リサーチにより「学校以外で学べる場所」に一定の需要があることは分かっており、それを踏まえたうえでの学習塾開校であったが、現地で一定の需要があることでも無料と有料では動員数にかなり大きな差が生じることが改めて分かった（任意団体時、1か月間オンライン英語教育を受けてもらうテスター（無償）の募集をしたところ、問い合わせが殺到し、告知1時間で締め切ったという経験があった。今回の学習塾も無償にすることで応募人数は増えたかもしれないが、約束事を守って継続的に通塾すること自体が困難な層が応募してくるリスクもあるため、まずは上記ターゲット層にフォーカスして有償でのサービス提供を行うことにした）。

②学習塾という施設は活動地初のものであったので、現地の人には塾という概念がそもそも無い所からのスタートだった。伴走支援者さんから、「初めて」のことを現地の人に受けて入れてもらうには良し悪し関係なく時間を要するものだと予めご助言いただいていたが、特に塾生の集まり具合については想定以上のハードルの高さを感じた。また学習塾の認知度を上げていくには、地道に活動を続けていき口コミで少しずつ広がっていくしかないということも痛感した。

③無条件・無償で誰でも入塾を許可する方向性で活動地における教育の普及・浸透を目指すというやり方もあるかもしれないが（特に法人代表は教育の機会が得辛い貧困層へリーチしたい気持ちがある）、本団体の人材規模では保護者の理解・協力無しに現地の子供と共に活動するのは不可能であることはこれまで

での経験でわかっている（学校担任が施設使用料を負担して自身のクラスの子どもを入塾させたケースがあったが、保護者の理解がないため結局は継続的に通塾できなかつた等）、まずは一定数の塾生（一学年 12 人目安）が確保されて自走運営（①現スタッフ給与の資金源を自給自足する手立てを確保②現地スタッフが代わっても支障なく運営できるよう指導法を体系化・マニュアル化し引継ぎ可能な状態にする）の目星をつけることを第一に目指し、その後、奨学制度の導入を検討することとした。

④教育への意識が高くない層（貧困層が多く、法人代表がリーチしたい層と被る）の意識改革をどのように促していくかが次期の重要課題のひとつである。一案として、本学習塾で身に付けた初等教育をベースに中等・高等教育を学び、それを自身のキャリア形成に活かしたロールモデルを数例出し（数年で結果が出ることではないので、学習塾を継続運営していくことが何より肝要）、学びの実用性を示す案が出ている。

（４）今後の活動・フォローアップの方針：

24 年 4 月～7 月、法人代表がグアテマラに渡航し、新規塾生の募集及び選考を現地スタッフと共に行う。23 年 9 月～24 年 3 月の間、現地スタッフで運営してきた指導内容の向上出しを行い、体系的な改善を図る。このような現地スタッフとのブリーフィング+指導内容や運営の改善は 24 年度の話ではなく、オンラインによる定期ミーティング+法人代表の毎年の現地渡航に伴って今後も継続していく。

学習塾内で特に効果的だった教授法については現地小学校教員向けに成果報告会等で公開・共有し、ゆくゆくは現地教員の指導研修制度を設けるなど、現地小学校との連携も今後取り入れていく予定。塾の学習効果が塾生以外にも波及していくことで、活動地における教育の普及・浸透を目指す。

3. その他(エピソード・感想・写真など)

(1) 活動中のエピソード・感想など

法人代表は今回で通算5度目の渡航となるため、活動地の生活事情はある程度わかっているつもりではいるが、それでもグアテマラ人のタイム感の違いには毎回驚かされる。一枚の書類発行に一か月以上という想定外の時間を要し、とあるプロジェクトの進行が数週間遅れるその一方で、学習塾に取り付けた Wi-Fi 機器の交換依頼の電話をした1時間後には工事が完了する（日本では考えられないスピーディさ！）等。グアテマラは（自分とは無縁な）外的要因で不測の事態が生じることが多く、予定変更は日常である。そんな中でも「なんとかなるさ〜」と逞しく生きている現地の人々が好ましいし、その精神性にあやかりたいと思う。

(2) 活動の写真



↑算数クラスの様子。たし算の100マス計算のタイムトライアル中。



↑ 作文クラスの様子。日記やテーマに沿った作文を通じて、書き方の基本を学ぶ。



↑ 読書・読み聞かせクラスの様子。朗読の後、本の内容理解を問う問い掛けも行う。



↑リベラルアーツ道徳・公民クラスの様子。明確な正解がない中での考え方や倫理観を学ぶ。



↑英語クラスの様子。英語を用いた日本人同世代とのビデオレター交換も試験的に行っている。



↑リベラルアーツ楽器練習クラスの様子。ピアノカ（日本からの寄付）を用いて練習。現地は鍵盤楽器の馴染みがないため、基本は演奏動画を見てメロディーと運指を覚える。時折 JICA ボランティアの有志が直接指導をしてくれる。



↑リベラルアーツ美術クラスの様子。自身の名前をデザイン的に表現する実習。



↑クリスマスチャリティコンサートにて「もろびとこぞりて」のピアニカ演奏を披露する塾生。

（3）JICA 基金活用事業を受託したことで団体の成長につながった点・良かった点

JICA 中部の担当者さまが本事業に大変好意的で、本団体のことを本当に親身になって支えてくださった。伴走支援制度を申し込んだことで定期的にミーティングの場を設けて下さり、JICA 担当者さまと伴走支援者さまに進捗報告することで現状の客観把握と次の課題点が都度明確になった。また、事業を進めていく上での悩みを相談した際、心に染み入るご助言を幾度も頂戴した。伴走支援についても、この方しかいない！という素晴らしい方をお引き合わせくださり、渡航中の安全確認や報告書類作成等についても担当者さまのお力でなんとかなった案件が多々ある。ここまで丁寧かつ的確かつ有難いフォローアップは JICA 基金以外でお目にかかったことがない。最初にして最高の担当者さまであった。内藤さん、厚く御礼申し上げます。

4. チャレンジ枠の伴走支援制度等について

(1) チャレンジ枠で事業を実施した率直な感想を記載ください。

本団体にとっては初めて採択された助成だったので、伴走支援制度を利用することで、団体関係者以外の国際協力関係の方々に本事業についてじっくり話を聞いてもらえる機会は本当に有難く、心強かった。本団体にとって100万円という額は非常に大きな額で、この資金があったからこそ、ここまでスムーズに短期間で学習塾を立ち上げて運営することを成し遂げられたと思っている。またプロジェクトを進めるにあたって、「大元がブレなければ細かい予定変更は構わない（申請時点の計画準拠にそこまで拘る必要はない）」とエンカレッジしてくださったことも、本事業における2つの大目標が達成できた大きな要因である。本団体の活動の裏で、JICA 担当者さまは書類作成時の確認修正から計画変更などに伴う諸調整に至るまで、おそらく陰ながらのご苦労があったかと思う。そんな中でも、私たちが目標達成に向けて集中して事業が遂行できるよう多方面から支えてくださったこと、只々感謝の念に堪えない。

(2) 事業計画策定や業務進捗のモニタリング等の際に伴走支援者から受けた助言が本事業においてどのように役立ったか、具体的な事例があればご紹介ください。

国際協力事業超初心者の本団体にとって、伴走支援とは、国際協力関係の先輩としてのアドバイザー的な立ち位置を申請当初は想定していた。しかし、本団体の伴走支援者さまは本事業の進め方に対して具体的な助言・意見をいうことは基本的になかった（参考となりそうな「データ」は適宜ご教授くださった）。代わりに、私たちが心配な点・課題と感じている点を対話の中で一緒に深堀りしていき、漠然としている話の中から具体的なボトルネックが何であるのかを私たちが自ら気付くような築論の場を毎回提供して下さった。自分たちだけでは問題解決の打開策がこれ以上思いつかないという状況下でも、伴走支援者さまとお話しすると、新たな視点・別の角度の視点に毎回気付くことができた（メタファシリテーションという対話法らしい）。例えば、本事業の一番のカギである現地協働者の決定方法について、当初は公平性や自主性を考慮して公募する予定であったが、伴走支援者さまの「例えば現地協働者に求める条件は何がありますか？」「今いくつか挙げられた条件に当てはまる人は思い浮かびますか？部分的な該当者でも良いです」等と話を進めていくうちに、ある程度具体的な理想像があって、それに当てはまる人物が思い浮かぶのならば、その人を現地協働者として直接勧誘するのもひとつの手だな、と気づかされた。そして、私たちの理想とする人物が現地協働者になってくれたことにより、本事業の今期活動目標を達成することができたのである。

「正解」がない中で模索しながらプロジェクトを進めていくことは不安も常に同居するが、自ら思い付いた（発見した）ことを基に進めていくと、やはり納得感も大きく後悔も少ない（類似例の情報収集は必要であるが、これらの情報は「参考の一例」には成り得ても、これらそのものが自分たちにとっての「正解」になることは実は少ない）。そして、本事業について結局のところ一番よく知っているのは何より自分たちなのである。この気付きは、今後さまざまな事業に取り組み決断していく上で、非常に重要な指標になると思っている。松浦さん、心より感謝申し上げます。

(3) 上記2点を踏まえ、団体の成長となった部分や活動の成果、本事業を通じた学びや今後の方向性について記載ください

このような助成金を受けられる規模の事業を成し遂げられたことは、団体としての実行力・運営力が一

定の水準にあるということの自信になった。と同時に、現在の本団体実働人数では、今期のようなハイペースでの事業拡大をこれ以上行うのは難しいことも痛感した。今後は現状の活動を維持しつつ組織としての体制を整えた後に、団体結成当初からの大目標のひとつである「グアテマラ人の社会的自立への帰結」を目指し、日本からの助成・サポートに頼らずとも、現地人の活動で完結して自走できるような教育活動の体制づくりに取り組んでいきたい。